虹（にじ）

生誕100周年がスイッチ

⑰⓪ 沈黙の彫刻家と夫が残した空間

毛利さんが手掛けたランプを眺める柳原さん。奥の壁には、毛利さんが制作した彫刻が飾られている

「ＺＡＴＳＵＭ」。しゃれた英字の肩書きが、造形作家の柳原幸子（やなぎはらさちこ）さん（70）の名刺に躍る。幸子さんは黒部の山里にあるシーラカンス毛利武士郎（もうりぶしろう）記念館を運営している。ＺＡＴＳＵＭとは雑務のこと。「草むしりしたり、掃除したり。人を雇うお金は全然ないから」と笑う。

記念館は日本を代表する彫刻家、毛利武士郎さんのアトリエだった。コンクリートの床には黒い油染みが残る。毛利さんは手仕事にこだわらず、旋盤やドリルを使って制作した。床の染みはその名残だ。毛利さんの作品もそこかしこに飾られている。

毛利さんは1923年生まれで、実験的な造形で注目を集めた。ある時期に表舞台から姿を消し、創作だけに傾注した。この間、新作を発表しなかったことから、「沈黙の彫刻家」とも呼ばれた。2004年に81歳で亡くなるが、「若い作家のため役立ててほしい」という遺志から、アトリエはギャラリーとして活用されることになった。

鋼鉄の塊だったり、平面の裂け目に曲線を見え隠れさせたり。毛利さんの作品は難解だ。異名のままに寡黙な作家で、制作意図を説明することはなかった。しかし、ＺＡＴＳＵＭの背景は分かりやすい。幸子さんの夫、正樹さんが由来だ。「夫は亡くなる前、『学芸員は雑芸員』と言っていました。頭脳労働も、肉体労働も必要な仕事でしょう。私は学芸員の資格はないけど、雑務ならうそにならない」。正樹さんは数々の企画展を成功に導き、全国的にも名の知れた学芸員だった。多くの美術家から愛された。

30歳近く離れていた毛利さんにも信頼された。正樹さんは毛利さんを「美術界に媚（こ）びることもなく、時代の変化に翻弄されることもない。ただ自身の追求する造形の形態を問いつづけている」と評している。記念館は２人の縁から生まれたアートスペース。幸子さんはそれを守り続ける。

◇

東京出身の幸子さんが正樹さんと出会ったのは小学生の時だ。２人の父親は黒部ダムの建設に関わり、それぞれの一家は長野で暮らした。卒業を待たずに正樹さんが地元の黒部に引っ越したが、文通が続いた。「今の学校に気になる人がいる」という甘酸っぱい報告を受けたこともあったが、なぜか結婚に至った。「腐れ縁ですよ」と笑う。

長野の小学校では、担任の教諭が美術教育に力を入れた。その影響か美大に進むことになる児童が多かった。幸子さんも正樹さんも表現に関心を持った。幸子さんは美術家に、正樹さんは学芸員になった。

正樹さんは1983年、富山県立近代美術館で現代彫刻の展覧会を担当することになった。出品作家を決める際に、美術評論家から毛利さんの名が挙げられた。もちろん毛利さんという存在は学芸員としては知っていた。しかし、当時の毛利さんは新作の発表を控えていた時期だった。「既に死んでる人だ」と思い込んでいた。

東京のアトリエを訪ねると、毛利さんは健在だった。出展はにべもなく断られた。しかし、何度か足を運ぶうちに心を動かした。振る舞われる飲み物が、お茶から酒になった。出品を決めたという意味だった。正樹さんのざっくばらんな人柄が気に入ったのだろう。約20年ぶりに表舞台に現れた毛利さんの作品は話題になった。幸子さんは、その彫刻を目の前にして「頭をガンと殴られたみたい」と思った。恐ろしいほどエネルギッシュな作品だった。

沈黙を破った彫刻家は、富山と縁を深めた。９年後、69歳で黒部の山里に移住した。毛利さんは創作に大型工作機械を用いた。作動音がうるさく、都内の住宅地では作業しづらい。「仕事ができるとすればあと10年」と言い、芸術家人生の総仕上げをする終（つい）のすみかを求めていた。家とアトリエ建設の候補地を案内したのが、正樹さんだった。

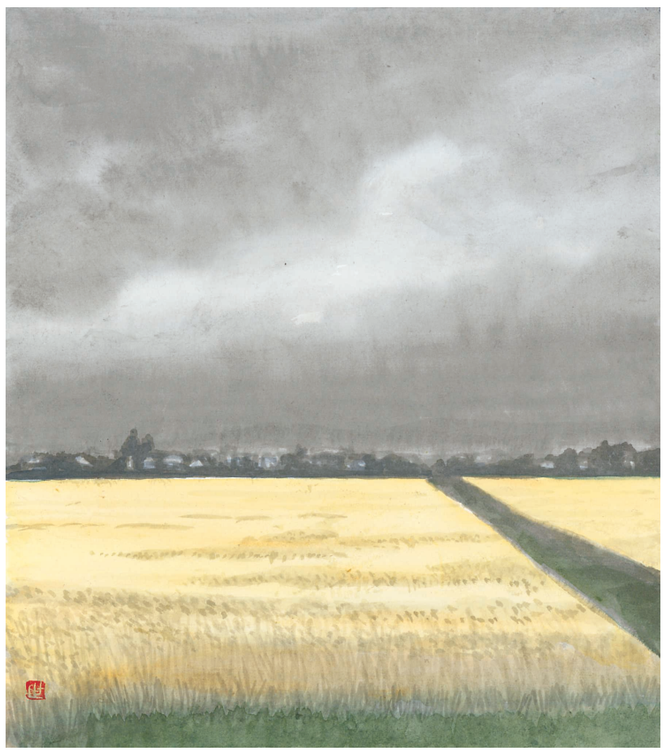
すみかが変わっても、頑固さは変わらない。創作に没頭し、政治家や芸術団体の重鎮が面会を希望しても拒んだ。遠方の葬式にも参列しなかった。言い訳は「もう死んでしまったんだから仕方ない」だった。時間とエネルギーのほとんどを仕事に費やした。

◇

地元の作家たちとは交流した。幸子さんが訪ねると「最近みんなどうしている？」と聞かれることがあった。「集合」の合図だった。自宅で料理を持ち寄り、酒盛りした。集まりに参加していた日本画家の清河恵美（きよかわえみ）さん（75）は「毛利さんは本質的なことをズバリと言うから気を抜けなかった」と話す。

「この小役人め」「あんたみたいな頑固な作家は見たことがない」。毎回のように毛利さんと正樹さんは口論した。幸子さんら他の出席者が場を収めて、お開きになった。

しばらくすると何事もなかったかのように宴会をし、またけんかした。親子ほど年の離れた毛利さんと正樹さんの間には頑丈な信頼関係ができていた。1999年に個展の開催を提案されると、毛利さんは「スケジュールに穴でも開いたのか」とからかったが、結局同意した。生前最後の個展になった。



「麦雨」広田郁世

◇

個展から５年後、毛利さんは旅立った。本人が計画した通り、黒部で約10年間創作だけに打ち込んだ。正樹さんや幸子さんは主を失ったアトリエを守った。夏は草むしりをし、冬には屋根の雪を下ろした。

多くの美術家と付き合いがあった正樹さんだが、毛利さんは特別な存在だった。「単純に美術展をやらせてもらったとかではなく、その背中をずっと見ていた。学芸員と作家で立場は違ってもたくさんのものをもらっていたんです」と幸子さん。

2015年。北陸新幹線が開業したタイミングに合わせ、記念館をオープンさせた。元手は正樹さんの退職金だった。

正樹さんは国立美術館の館長に抜擢（ばってき）され、富山を離れていた。幸子さんが記念館の運営を託された。毛利さんが創作に打ち込んだ空間には遺作の石こう像も残る。幸子さんは「最初は分からなかった毛利さんの作品も、ここにいたら『あ、そういうことか』と分かる瞬間がある。何年たっても、それが面白い」と言う。

コロナ禍が訪れた。用意した展覧会がいくつか吹き飛んだ。21年には正樹さんが亡くなった。がんを患っていた。幸子さんは、その年に予定していた企画を全てやり切ったが、次の年は一つしかできなかった。要職に就いていた家族がなくなれば、遺族は何かと忙しい。気落ちしていても、諸団体への連絡や、書類の手続きで気ぜわしかった。

毛利さんのファンという小説家が訪れた。「2023年は毛利さんの生誕100周年ですよ」と教えてくれた。そう聞くと、幸子さんの心にスイッチが入った。「毛利さんのことを広めるチャンスになる」。地元の黒部市美術館に相談すると、「黒部の作家」として企画展を開いてもらうことになった。

記念館でもグループ展や、毛利さんが生前デザインしたランプの企画展を開いた。停滞しかけた記念館の活動が、節目を機に急に活発になった。「毛利さんが駒を動かしているみたい。柳原も一緒にお酒でも飲んで笑っているんでしょう」

幸子さんも老いてゆく。いつかは記念館を守るべき役割を他の人に委ねないといけない。手弁当で運営する施設を手伝おうという物好きな若者はそうそういない。だから、少しでも関心を持つ人を増やしたい。

100周年を教えてくれた小説家に「あなたのおかげで奮起することができました」とお礼のメールを送ると、「来年は没後20周年ですよ。記念館の開館10年目でもあります」と返事が来た。「今年のことだけで精いっぱいなのに」と笑ってしまった。だけど、来年も頑張れる気がした。

シーラカンス毛利武士郎記念館は富山湾を望む見晴らしのいい場所にあります。現地に行けば、毛利さんがこの場所を選んだ理由が分かる気がします。その際はぜひ黒部市美術館にも。企画展「生誕100年　毛利武士郎と黒部」が25日まで開かれています。黒部での創作を続けた作家の軌跡がたどれます。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911　高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX　0766－25－7773
mail　niji@kitanippon.jp

次回掲載は７月１日（土）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局